十一月十四日、十五日の二日間、刈谷本願道場、三重の松林寺本願道場へ同行させて頂きました。

刈谷本願道場は、亡き水本健太郎さんの弟さん、紀久夫さんが一念発起されて開かれました。健太郎さんが仏法に篤く帰依された志を、自分もまた受け継がねばというお気持ちで、御法座を開く決意をされたと、法座の度にお話しされます。刈谷は名古屋駅から電車で四十分ほどのところにあり、駅から車で十分ほどの距離に水本さん宅はあります。私たちは朝、中津駅を六時五十分発の特急ソニックに乗車、小倉駅から新幹線に乗り換え名古屋駅へ向かいます。電車を乗り継ぎ刈谷駅に到着すると、祐司君のお母さん、陽子さんが迎えに来て下さっています。ちょうど昼の時間になり、健太郎さんの奥さんのスミさんがいつも手料理を用意して下さっていて、午前中からお参りの方たちといっしょにテーブルを囲み、お昼をご馳走になるのが恒例です。スミさんは船のコックをされていた健太郎さんから仕込まれたそうですが、お店をされていたこともあるので、プロ並みの腕前です。この度もまるでレストランの料理のような色採りの美しいシチュウをご馳走になりました。陽子さんやスミさんの妹さんののぶ子さんが台所のお手伝いをされ、御法座を支えて下さっております。健太郎さん御夫婦と、弟の紀久夫さん御夫婦は、共に兄弟姉妹同士なのです。紀久夫さんの奥さんはすでにお亡くなりになっています。大きな家ですから、私たちも何度か泊めていただきました。健太郎さん、スミさんを中心に、双方の御兄弟姉妹が集うて、今では珍しい大家族を形成されています。亡き健太郎さんが仏様を大切に生きてこられたご姿勢が、遺された御家族の中に浸透しています。壁に掲げられた健太郎さんの笑顔の遺影がいつも御法座を見護って下さっています。

その刈谷本願道場へ到着すると、決まって田中秀法さん、はる美さん父娘のお二人、村松粽さんや砂見玲子さん、國松きみ子さん等、常連の方々がお参りになっておられます。村松さんは大石先生の御法座にもお参りされていました。長仁寺にも何回かお見えになったことがあります。多く語らずとも遇えばお互いに目と目で、遇えてよかったねと無言の挨拶が通じます。砂見さんとは、岐阜の田中さん宅でお会いしていました。私とは共通したところがあって、お互いに分かり合える仲です。はっきりと発言をされるので、進み方が早いなと感じます。國松さんは、学校の先生をなさっておられた陽気な方です。わからないといいながらも、その表情には笑顔が見られるようになり、法に触れられたことが伝わってきます。裕司君のお母さんに加えて、今回は久しぶりに川口秀明さんもお参りでした。祐司君は仕事でお休みでしたが、常照さん宛ての手紙をお母さんが預かっておられました。その手紙を常照さんが最初に読み上げ、法座が始まりました。手紙には、「お念仏が称えられるようになったが、不安が生じてきた」という短くても深い問いが書かれてありました。お念仏を称えることは出来ても、それで安心できるほど、御信心は簡単な世界ではありません。そこからが本当の聞法のはじまりと言えるでしょう。祐司君はそこに直面されたのです。多くの聞法者がその問題に直面します。「うす皮一枚が晴れない」とか表現されてきました。そこで仏法から離れてしまえばそれまでですし、宿善があれば、そこからがさらに真剣な聞法となります。刈谷の本願道場は、決して多いとはいえない人数ですが、お一人お一人が真剣なので、人数が少ないと感じることはなく、一回一回が内容の濃い御法座になります。仏法は、聞けども聞けどもこれで充分だとならないし、聞けば聞くほどますますもっと聞きたくなるものだと昔の念仏者からお聞きしたことがあります。終わりの無い世界です。年老いて、ますます意欲が湧いてきます。ですから老いているヒマがありません。そこが大きな御利益です。

この刈谷本願道場へ出発する二日前、新潟の林康一朗さんからラインで常照さんへ質問が送られてきました。ご本人の承諾を得て、長仁寺リモート法座のグループラインに紹介させて頂きました。祐司君のお手紙にあった疑問と通じる問題です。この問題については後でまた述べさせて頂きます。

お昼を頂きながら、常照さんが「これが本当のお斎だ」と言います。一般の個人のお家で、少人数で集まり、食事も共にし、仏法聴聞させて頂く、そういうことがお寺の始まりだったのでしょう。そこから、共同意識が芽生え、葬儀などを助け合うようになった講が形成されたのかと想像されます。今は、ほとんどのお寺が儀式をメインに成り立っています。本末転倒してしまいました。常照さんが、本来の聞法を目的とした道場に帰ろうと本願道場を提唱し、それに賛同して下さった中の一つが刈谷本願道場です。そこに関わるお一人お一人は、仏法を伝えるという如来様のお仕事をお手伝いされる諸仏様だと感じます。私もその中に加えて頂き、法を頂く歓びと苦しさを共有させて頂いております。各地の本願道場はお寺もあれば、在家のお宅もあります。聞法を中心とした集まりが、形にこだわらずささやかながらも増えて行くことが願われます。

刈谷本願道場を終えるとその足で三重の松林寺本願道場へと向かいます。スミさんの娘さんの郁子さんがこの度も刈谷駅まで送って下さいました。名古屋駅までは田中さん、はる美さん、川口さんもいっしょでした。名古屋駅に着いて三人とお別れすると、近鉄に乗り換えです。

小一時間、電車に揺られ豊津上野駅に到着すると、森住職さんの奥様、順（より）子坊守さんが車で迎えに来て下さっていました。いつもは森住職さんが迎えに来られるのですが、今回はお寺で行事があり、住職さんはそちらの用意がありました。森さんはいつも法務に忙しくされています。そういう中で、私たちを招いて御法座を開いて下さるのです。

刈谷本願道場の水本さん、田中秀法さん、はる美さん等も続けて松林寺本願道場へ参加されます。松林寺本願道場でも、最後は参加者が一人一人、心境を述べる時間です。昔から顔なじみの方もあれば、最近になって御縁が結ばれた方もおられます。ご自分の内面を語られる尊い言葉に、時間を忘れて聞き入ります。最後の人まで時間が足りなくなるほどです。近鉄特急に乗るため、白子駅まで渡辺誉さんに車で送って頂きました。渡辺誉さんは新潟県出身の在家から入寺されたお坊さんです。最近とみに御縁が深くなってきた新潟出身と聞いて親近感が増します。

深夜に中津に帰る道中、小倉駅で特急ソニックを待ちながら私は、刈谷本願道場での座談会の最後に、常照さんが口にした「如来様と自分が離れている」という言葉や松林寺様でお話させていただいた「真・仮・偽」についてのことがもやもやと脳裏にありました。そのとき曽我量深先生の

「如来、我となって我を救う。されど我は如来にあらず」

とのお言葉が御廻向くださり、雲が晴れるようにスッキリさせられました。「如来様と自分が離れている」というのは、我の自分が居て、我の自分が如来様へ向かう在り方です。如来様が私に如来して下さる、私の中にまで入ってくださって救ってくださる。それは御廻向です。しかし、私が如来になったのではない、私は煩悩具足の凡夫に変わりありません。煩悩具足の凡夫と如来様の両者が一にして二、二にして一という不一不二（ふいつふに）の状態を言い現わしてくださったのが曽我先生のお言葉です。

「如来、我となって我を救う。されど我は如来にあらず」のお言葉は、以前から聞いて知っていました。仏語というものは、聞いてすぐ理解できるものではなく、わからないというのが常ですが、そうかといって自分に関係が無いわけでなく、意識されない心の底に届いて下さっていて、時機がくればこのように出番を待っていたかのように、表面に姿を表して下さいます。仏語は仏様のお言葉ですから、生きて私を救ってくださいます。先師のお言葉は真実に目覚められたお言葉です。こちらが熟するのを待っておられました。私は懐かしい人に会えたような歓びを感じて、真っ暗な夜道も明るい気持ちで走れました。さらに家に帰ると、新潟の渡邉義彦さんからのありがたいお葉書が届いていて、常照さんが「疲れが吹き飛ぶね」と言いました。

『教行信証』を開きますと、「真・仮・偽」についての御解釈があります。親鸞様によって「仮」が独立され、より厳密に御信心の内容について説き明かして下さいました。「真と偽」では、分かりやすいのですが、そこに「仮」の立場が据えられることにより、御信心の純粋さが問われて参ります。お念仏が出ているからご信心がある、と単純には言えなくなる問題があるのです。祐司君が直面された問題です。私も、お念仏を称えながら、少しも自分の心が晴れない苦しい時期が長く続きました。表面上はご信心のことを話していても、心はどこか嘘をついているという疑いが付きまとうのです。芯から晴れません。しかし、実際、坊守としてお話するときには、ご信心をお勧めするようなことを言ってしまっているのです。二十願は「半他力半自力」とか、「法は他力、機は自力」と表されます。常照さんが指摘した「如来様と自分が離れている」状態です。二十願はご信心を求める人が必ず行き当たる問題です。その問題を無視せず、説き明かして下さったのが七高僧様方であり、親鸞様です。

先ほど、少し触れました新潟の林康一朗さんのラインを使って届けられた質問を、要点だけ絞ってご紹介させていただきます。

　「　　（前略）　　私はお聖教を閉じると元に冷えた私に戻ってしまいます。私が浄土に生まれたのではなく、お聖教の力をいただいているだけなのを感じます。　　　（中略）　　　　２０願から１８願に転入させていただくということが、まだ私にはいただけません。釘の私が磁石になろうとしておりました。その私の姿が、先生が如来様をふみつけとると言われたことで知らされました。・・・・

　　先生がいただかれるところをお聞かせいただきたく、お願い申し上げます。南無阿弥陀仏」

この問いに対して、常照さんの応えが次の通りです。

　「釘の自覚が、まだ頭で捉えている。だから、離れ離れになっている。釘となったら、そこは磁石なんや」

　このやり取りを見られた河野久美子さんがさらに質問をラインで送ってこられました。

　　　「「釘となったら、そこは磁石なんや」とは、磁石に

ひっつけ！って事ですか？」

　皆さん、同じような問題にぶつかり真剣です。私自身も問われます。刈谷へ向かう道中、疑問のところを質問しました。

　「自分にとって、本願というのは善知識である大石先生を通して頂けるのであり、大石先生という生きた方に直接お遇いしなければ、本願の世界も観念でしかない。本願と善知識は一つです。本願と善知識を分けることはできないのだが・・・？」

それに対して、常照さんが応えるには、

「善知識を善知識たらしめている本願に向かわねば、善知識頼みになる。それは足が止まるから、注意しなければならない」との答えでした。そして、

「『捨身の半偈』の教えで、前半は自力でわかるが、後半は身を投げ出さねば得られない」。

要するに、自分が残っていては頂けない、我が死ななければならないということです。実際に自分の足で歩み、冷暖自知、自らが至ってこそ頂ける世界です。ご信心のことは、開けた方（善知識）に親しんで導いて頂かなければ進めません（光明のお育て）。御縁の皆様が互いに励まし励まされながら深まって行かれる中で、私も成長させて頂きます。

先日ある方が、「念仏してきたけれど、何の甲斐もなかった」と吐露されました。私はその場ではなにも言えなかったのですが、残念な気持ちがしました。お念仏は称えて、これから何とかなる教えじゃあない、すでにたすかっていることに気づかされる教えではないかと御廻向して下さいました。私たちは迷いが深く、正しくものが見えない。見れども見えず、聞けども聞こえずです。しかし、よくよく知らせてもらえば、すべてが輝く世界におらせて頂いているのだ。それを知らず、あれが悪いこれが足りんと不足が次から次に出てくるのは、煩悩に覆われていて、正しくものが見えないからだ。念仏を何か自分を幸せにしてくれる打ち出の小づちのようにとらえて、欲を満たそうとする。それはまったく見当違いです。これは「偽」の世界から出る、罪福信です。そこには如来様がおられません。「偽」から「仮」へ、そしてさらに「仮」から「真」へと導かれるときに三願転入（転入の信=帰命）となるのですが、そこは阿僧祇劫（あそうぎこう）かかると言われているので、長い時間がかかります。では絶望かといえば、案外早くたどり着ける、すでに足元に開けているといわれるのです。人間の頭が早く降参することです。

　今年も残すところひと月となりました。今年度はたいへん実りの多い年となりました。新年から「常照・法喜法話シリーズ」と称する三分冊の冊子が出ました。また六月には『あなたが救われなさい』、そして、十月には『リモート法座（一）』と続きました。『リモート法座』は、今井千津子さんのご尽力があり、更にいつものように法隆光昭さんのお手をお借りしました。法隆さんからはすでに、十月二十八、二十九日の林康一朗さんのお寺、圓性寺様、等覚寺様での報恩講、本願道場の法話のテープ起こしを終えてデータが送られて来ております。また、十月のベラルーシリモート法座も、すでにテープ起こしを済ませて下さっています。

　常照さんが「今年、五冊も出たな」とうれしそうに話しますが、皆さまのお力添えのお陰です。そして、リモートに参加してくださる方々のお陰でもあります。今回はたくさんの方々のお名前が出て参りましたが、まだまだ多くの方々に支えられて、本願道場の活動が順調に運ばれています。今日はこれから聞光道です。いつも田川からお参り下さる慈光寺ご住職の新開さんと息子さんの智英さんはリモートにもご参加下さいます。宇佐の渡辺さん御夫妻。奥様のお友達の土橋さんは、北九州からお参りです。日田の伝照寺前御住職の原説丸さん、美都璃さん、ご近所の田島耕一さん等がお集まりくださいます。長仁寺の御門徒の中にも、『通信』や『長仁寺報』を喜んで読んで下さっている方がおられます。久保英一先生は、御高齢のはずですが、『通信』や『長仁寺報』をお送りすると、手描きの親鸞様や仏様を描いて送って下さいます。大きな励ましをいただいております。

「昨日は過ぎた、明日は来ない。あるのは今だけ。今この時に全力投球」。大石先生が、お浄土へお浄土へと一歩一歩進んで行かれたお姿に、引っ張って頂きます。

ナムアミダブツ　ナムアミダブツ　合掌　　　　　　　法喜